

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21720300

研究課題名(和文)

沖縄および中越における闘牛の存続と意義

研究課題名(英文)

Significances and continuations of bullfighting in Okinawa and Chuetsu

研究代表者：

石川 菜央 (ISHIKAWA NAO)

名古屋大学・環境学研究科・研究員

研究者番号：70456698

研究成果の概要(和文)：21年度は、主に岩手県久慈市および沖縄における調査を実施した。久慈市では、市内で開催された全国闘牛サミットおよび全国闘牛大会にて、来場者へのアンケート調査、牛主への聞き取り、資料収集を行った。沖縄では、闘牛がさかんなるま市や読谷村、北谷村、今帰仁村などで、牛舎を訪れ、牛主に対する聞き取りを行った。22年度は、調査のまとめと発表、論文文化を重点的に行った。研究の目的における「日本における闘牛の存続の要因を解明する」点について、現代では闘牛を通じた担い手の交流が活発になっていることに着目し、成果発表を行った。

研究成果の概要(英文)：I have conducted fieldwork in Kuji-city, Iwate prefecture and Okinawa prefecture in 2009. In Kuji-city, I went to nationwide bullfighting summit and bullfighting game. I carried out questionnaire survey, interview with bull's owners, resource acquisition there. In Okinawa prefecture, I visit some bull sheds and made interview survey on bull owners. In 2010, I made a presentation in international meeting and wrote some papers. Especially, I found out bull owner's nationwide information exchange contribute continuation of the event.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文地理学

科研費の分科・細目：人文地理学

キーワード：闘牛, 伝統行事, 文化地理学, 観光, 民俗

## 1. 研究開始当初の背景

日本の闘牛についての研究には、3つの課題がある。第1は、担い手の活動や現代における意義に着目した研究の少なさである。国や県から文化財の指定や選択を受けている中越、隠岐、南予では『南予地方の牛の突き

あい習俗調査報告書』など、民俗学や郷土誌の観点から歴史的変遷や習俗の保存状態などに関心が払われるものの、担い手の活動や存続との関係についての考察が行われていない。一方、担い手が多い沖縄や徳之島では名牛や名勝負の記録は多いが、地域における

位置づけなど全体像を見ることが必要である。解決のヒントとして、パリの闘鶏を対象に、動物の闘いを通して人同士が闘っていることを見抜いた Geertz (1973)、これを援用し徳之島の闘牛における牛の売買や勝ち負けをめぐる担い手の社会関係を分析した曾我(1991)があり、本研究でも参考にしたい。第2は、闘牛を介した全国的な交流についての研究の少なさであり、桑原・尾崎・西村(2007)などにより始まったばかりである。こうした研究が少ないのは、すべての開催地で詳細な調査を行った研究者が一人もいないことによる。申請者は、すでに3地域で研究を完了しており、残る3つの地域で研究を進めることで、日本の闘牛の存続に関する初の本格的な論考を完成できる。

第3は、海外における闘牛との比較である。マーヴィン(1990)は、スペインの闘牛における牛と人の対決は、自然と文化の対決を意味すると指摘する。これに対し、役牛の力比べから始まった日本の闘牛では、牛は共に働く仲間という意味合いが強い。闘牛の背景にある東西の動物観、自然観の差異について比較、検討を行えば、闘牛を切り口とした学際的な文化論の展開が可能になる。

申請者は、闘牛が行われている6地域のうち、南予、隠岐、徳之島の3地域における存続の仕組みを解明した。1. 行政の主導で闘牛の観光化を進めた南予では、観光化に対する担い手の自主的な対応が重要であることを指摘した。2. 町村や県から文化財として闘牛が指定されている隠岐では、行政の支援を受けつつ、牛主の家族や近隣居住者が、闘牛大会を通して関係を強めることを指摘できた。3. 闘牛の後継者不足がないという点で、特異な地域である徳之島では、子供が闘牛の飼育に関わることが、大人から礼儀作法、愛郷心などを学ぶ場になることを指摘した。これらをまとめた博士論文では、伝統行事における闘牛の特徴として、牛が生活を共にする生き物として、愛情の対象となる点を挙げ、闘牛を通じた人々の社会関係を牛縁と名付けた。牛の売買を通して集落、地域を越えた担い手の結びつきができることや、闘牛大会を通して家族や近隣居住者が絆を強めることを指摘した。

申請者は、残る3地域についてもすでに現地調査を始めた。2009年度に集中的に調査を行う沖縄県は、全国で最大の闘牛用の牛の生産地で、各開催地に牛を排出しており、日本における闘牛の存続に欠かせない地域である。新潟県中越は、2004年における地震の被災地であり、牛の避難に関する協力をきっかけに、担い手個人レベルでの地域を超えた交流が始まっている。また、中越は、全国で唯一、闘牛の勝負を引き分けにする地域であり、他地域との比較を通して闘牛の意義を

検討できる。さらに調査を進め、両地域における闘牛の存続の仕組みを検討するとともに、闘牛を通じた全国的な交流を視野に入れ、日本における闘牛の存続要因を解明したい。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本で行われている闘牛が、農業との関わりがなくなったのにも関わらず続けられている要因を、担い手の活動に着目して分析し、闘牛の社会的な役割や意義にまで踏み込んで解明することである。牛同士を闘わせる闘牛は、農耕牛の飼育を背景に発展し、農業が機械化した1970年代以降も、担い手が専用の牛を飼育することで維持されている。日本の伝統行事が旧来の意義を失い、後継者不足などで衰退している中、担い手が膨大な経済的・時間的な負担をかけてまで自主的に闘牛を続けている要因を現地での綿密な聞き取り調査をもとに分析する。

## 3. 研究の方法

闘牛は、岩手県久慈市、新潟県中越、島根県隠岐、愛媛県南予、鹿児島県徳之島、沖縄県の6地域で行われている。平成21～22年度の研究では、中越や東北地方、沖縄に滞在するほか、全国の闘牛開催地の担い手が保存の対策を話し合う「闘牛サミット」が開催される久慈市でも調査を行う。具体的には、まず闘牛に対する行政の取組や観光化、闘牛の歴史の変遷、運営組織の成り立ちを踏まえる。次に担い手への聞き取りや観察などにより、彼らの闘牛を通じた社会関係の展開を検討する。そして各地域における闘牛の存続要因と特徴を考察する。主な調査項目は以下の通りである。

(1) 担い手への聞き取り…牛の持ち主である牛主(うしぬし)、闘いの際に牛をけしかける勢子(せこ)に加え、その家族、近隣居住者、観客などに対し、闘牛に関わり始めた動機や牛との関わりなどを聞き取る。稽古試合、共同牛舎の使用における担い手の社会関係についてもデータを取る。

(2) 闘牛大会の観察…大会までの過程(出場牛の決定、大会前後の宴会)などでいかに地域の人々が関わりを持つかを、牛を出場させる家で宴会の準備などの手伝いをしつつデータ取得に当たる。

(3) 資料収集…役牛の頭数の変遷や畜産に関する資料、闘牛に関する民俗や歴史に関する資料、新聞記事や役場の広報、闘牛大会の対戦表などの資料収集に当たる。

(4) 全国闘牛サミット…会議に参加し、地域間でどのような情報交換がされているのか

を把握する。また、サミットに合わせて行われる全国闘牛大会に出場する牛について、牛の出身地や売買の経緯などから地域間の交流の状況を検討する。闘牛大会では観客に対しアンケート調査を行い、彼らの闘牛との関わりや、サミットに関連してどの地域から観客が来ているのか、量的なデータを取得する。

#### 4. 研究成果

21年度は、主に岩手県久慈市および沖縄における調査を実施した。

久慈市では、市内で開催された全国闘牛サミットおよび全国闘牛大会にて、来場者へのアンケート調査、牛主への聞き取り、資料収集を行った。アンケート調査では、闘牛サミットをきっかけに初めて闘牛を見に来た地元客が多くいること、初めて闘牛を見た人にも闘牛が好評であることが分かった。他の闘牛開催地から来た牛主に対する聞き取りでは、引き分けを前提とする中越地方や久慈市の闘牛に対する戸惑いと、地元の闘牛とは異なる習俗を持つ開催地の闘牛を楽しむ声を聞くことができた。

沖縄では、闘牛がさかんなるま市や読谷村、北谷村、今帰仁村などで、牛舎を訪れ、牛主に対する聞き取りを行った。聞き取りでは、沖縄と最も距離の近い闘牛開催地である徳之島との違いや、徳之島の牛主との交流の状況について重点的に調査した。その結果、徳之島と沖縄では、1頭の牛のトレードが繰り返され、2つの地域を移動し、さまざまな牛主に育てられる中で牛が強くなっていくことが分かった。二つの地域の闘牛の違いについては、持ち牛が2回続けて負けると「応援してくれる人に申し訳ない」として、牛を手放す慣習がある徳之島に対し、沖縄では、持ち牛の勝率が5割程度であれば、手放さずに長く持ち続ける傾向がある。

久慈市・沖縄の両地域は、開催地としては離れているが、牛の売買や情報交換に関しては、交流が活発になっている。

22年度は、調査のまとめと発表、論文化を重点的に行った。研究の目的における「日本における闘牛の存続の要因を解明する」点について、現代では闘牛を通じた担い手の交流が活発になっていることに着目し、以下の成果発表を行った。

まず、21年度における研究と関連して、地理科学 65号に「闘牛大会の新規イベントとしての可能性」を掲載した。論文では、闘牛の習慣が全くない地域において行われた「闘牛フェスティバル」に着目した。そして、イベントが開催されるまでの過程、観客へのアンケート調査の結果を通して、闘牛が行われていない地域において、闘牛大会を行うことの意義について検討した。その結果、収益の面では赤字となるものの、闘牛自体は観客か

ら好評価を得ており、闘牛開催地の大きなPRにもつながると結論づけた。

次に、名古屋大学で行われた“The Oxford-Nagoya Environment Seminar”にて“Bullfighting in Japan: Social Relationships Created by the Event”とのタイトルで国際発表を行った。発表の中では、各闘牛開催地における特色やそれぞれの闘牛の存続要因について述べた上で、各地域における習俗の比較を行った。特に、新潟県中越地方と、徳之島における差異に着目した。勝負付けと引き分け、自分の牛が勝った時の表現の仕方のルールなどから、闘牛に対する価値観の違いを検討した。

表1. 徳之島と新潟の習俗の差異

	Tokunoshima	Nigata
Drawing apart	<b>boring</b>	<b>Both Look good</b>
If they win	<b>Express Their joy passionately</b>	<b>Don't Smile!</b> (°_°)
Decide A winner	<b>Fan</b>	<b>Too simple</b>

海青社から刊行予定の『ネイチャー・アンド・ソサエティ第2巻』では、闘牛における牛について、犬や猫などのペットとの違いを指摘した。もっとも大きな違いは、ペットが一つの家庭で生涯をまっとうすることが多いのに対し、闘牛は転売が繰り返され、複数の牛主に飼われることがほとんどである。それは、闘牛では、たとえ牛に愛情があっても負け続けた牛は手放さなければならないという暗黙のルールがあるためである。徳之島の牛主は牛の転売先として沖縄を選ぶことが多い。これは、両地域における牛の飼育方の差異が牛の長所を引き出し、牛をより長く活躍させることができるからである。

本研究の特色は、第1に、闘牛の担い手の活動を詳細に検討した日本で初の論考となったことである。これまでは、民俗学や郷土誌の観点から、闘牛にまつわる習俗や儀礼の方法を詳細に記述した研究が多く、存続との関係で担い手の活動や意義を検討した研究は行われてこなかった。

第2に、本研究では、地理学の立場から、担い手の社会関係を空間的な広がりに着目し、個人、集落、町村、地域、全国と、地理学が得意とする分析スケールを自在に変化させる手法を取りながら担い手の活動を検討した。これにより、闘牛自体への注目だけではなく、地域における意義や闘牛を通じた全国的な交流など、これまでになかった観点での切り込みが可能となった。

第3に、日本の闘牛の存続要因や意義を提

示することで、将来的には国際的な比較が可能となった。闘牛には、アジアで行われる牛対牛、ヨーロッパや南米で牛対人の2形式があり、それぞれの文化圏での牛の位置づけや動物観、自然観を反映していると予想できる。日本における闘牛研究を進めたことで、海外の事例との比較の材料を提供できた。

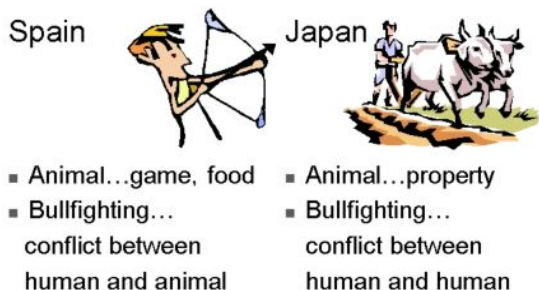


図1. 日本とヨーロッパの闘牛の対比

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 石川菜央, 和霊神社の闘牛, 2011, 査読無, 12巻, 2011, 印刷中
- ② 石川菜央, 闘牛大会の新規イベントとしての可能性—福岡県筑後市における「闘牛フェスティバル」を事例に—, 地理科学, 査読有, 65-3巻, 2010, 154-160
- ③ 石川菜央, 全国闘牛サミットの開催地における意義—岩手県久慈市の「第12回全国闘牛サミット」を事例に, 広島大学総合博物館研究報告, 査読有, 1巻, 2009, 45-51

[学会発表] (計4件)

- ① Nao Ishikawa, Bullfighting in Japan: Social Relationships Created by the Event, The Oxford-Nagoya Environment Seminar, 2010年9月10日, 名古屋大学環境学研究科
- ② 石川菜央, 牛が育む人の縁-闘牛を介した社会関係-, 地理科学学会第26回シンポジウム, 2009年11月28日, 広島大学
- ③ ISHIKAWA Nao, Characters and Significances of Bullfighting in Japan, 14th International Conference of Historical Geographers, 2009年8月26日, 京都大学
- ④ ISHIKAWA Nao, Factors involved in the continuation of bullfighting in Oki and

Tokunoshima islands, The Fifth International Small Island Cultures Conference, 2009年6月28日, Sado Island Development Center

[図書] (計4件) 分担執筆

- ① 石川菜央, 海青社, 徳之島の闘牛における担い手の活動と原動力, 『ネイチャー・アンド・ソサエティ第2巻生き物』, 2011, 印刷中
- ② Nao Ishikawa, Nagoya University, "Bullfighting in Japan: Social Relationships Created by the event" The Environmental Histories of Europe and Japan, 2011, 215-222
- ③ 石川菜央, 朝倉書店, 闘牛, 『祭り・芸能・行事大辞典』, 2009, 1201-1201
- ④ 石川菜央, たまさや, つながる! わかる! 闘牛の世界, 2009, 14-17

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況 (計◇件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]

ホームページ等  
「うしあたま」  
<http://nawobe.seesaa.net/>

報道関連活動

- ① 石川菜央 「闘牛が紡ぐ牛縁」 月刊マンスン生活情報誌ウエンディ, 2009年5月15日.
- ② 石川菜央 「突撃菜央ちゃん号と私」 BAS 雑記帖, 横浜国立大学グローバルCOE「生物多様性アジア戦略」  
<http://biodiversityasia.net/interview/index.html#20>, 2009年11月6日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石川 菜央 (ISHIKAWA NAO), 名古屋大学・  
大学院環境学研究科・研究員

研究者番号 : 70456698

(2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号 :

(3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号 :